

《2009年10月例会報告》

【日時】2009年10月28日（水）19：00～21：00（その後「ルン」。最終組は3：30まで）

【会場】筑波大学附属高校3F会議室（東京都文京区大塚1-9-1）

【テーマ】21世紀の東京オリンピックを考える

【報告者】嵯峨寿（筑波大学人間総合科学研究科）

【参加者（会員）】麻生征宏（榊学研教育みらい） 阿部博一（日本サッカー史研究会） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会） 北原由（都立武蔵野北高校） 国島栄市（ビバ！サッカー研究会） 嵯峨寿（筑波大学） 嶋崎雅規（帝京高校） 白井久明（弁護士） 高田敏志（町田高ヶ坂サッカークラブコーチ） 高橋義雄（筑波大学） 田中俊也（三日月整形外科） 徳田仁（榊セリエ） 仲澤眞（筑波大学） 中塚義実（筑波大学附属高校）

【参加者（未会員）】★池谷リサ（筑波大附高OG） ★佐野晶子（日本体育協会） ★白髭隆幸（JASPO） 杉山誠昭（榊学研教育みらい） ★野口敬（榊セブン&アイ・フードシステムズ（デニーズ））

【ルンからの参加者】庄司悟（未会員）

【報告書作成者】池谷リサ

注1) ★は初回参加のため参加費無料

注2) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

21世紀の東京オリンピックを考える

嵯峨 寿（筑波大学人間総合科学研究科）

<主なトピック>

1. オリンピズム貢献活動への寄付つき入場券
◆ディスカッション1◆
2. オリンピアンと国民とスポンサーの新パートナーシップ
3. 1964 Tokyo レガシー・ツアーとスポーツ・ミュージアム
◆ディスカッション2◆
4. 全国の学校でのオリンピック出前授業
◆ディスカッション3◆

はじめに（嵯峨寿）

招致活動には、安藤忠雄さんが代表のグランドデザインチームに加わり、主に、ビジョン、コンセプト、レガシーなど、IOCに提出する計画書の冒頭部分の作成にかかわった。

21世紀の東京オリンピックの基本になる「オリンピック・ムーブメント」について話したい。今後、どういうことをやっていけばいいか、4つのトピックスについてひとつずつ提案する。

1. オリンピズム貢献活動への寄付つき入場券

1964年の東京オリンピックは、日本が高度経済成長の総決算をすることができた大会で、オリンピックは、東京と日本に大きな恩恵をもたらしてくれた。2016年大会は、オリンピックのおかげで成長した日本の力をもって国際社会に対し貢献する、国際貢献型のオリンピックでいこうとの意気込みが強かった。

安藤さんは環境保護活動に熱心に取り組んでおられる。東京湾に「海の森」づくりを進めている。一所懸命、自腹をはたいて植林をしておられる。U2のボノは安藤さんとは大変に仲良しで、一緒に環境保全に取り組んでいる。大会コンセプトづくりを石原知事に任された安藤さんは、盛んに、これからは環境だと熱心に説き、2016年に向けて環境の大切さを訴えていくことを主張されていた。

東京都もこれに呼応するような素地があったのだろう。日本が世界に誇る環境技術を、オリンピック開催を機に世界へアピールする狙いがあったと思う。そういう環境技術を用いて再生した都市モデルを世界に知らしめようと考えたのだろう。青島知事時代に構想があったが中止になった都市博のニュアンスもあった。招致に名乗りを上げた当初石原さんは、オリンピックを通して「日本を元気にしたい」「日本の価値観を発信したい」と言っていたが、それがこのような経緯で環境に特化した。

環境オリンピックのコンセプトの評価だが、ムータワキル氏率いる評価委員が2009年4月に来日した際、環境をあまりにアピールしすぎたせいか、「IOCは国連ではない」「環境保護団体ではない」と釘を刺されたらしい。

環境以外のアピールポイントはなにか。半径8キロ以内に競技場の9割が収まる、「コンパクトなオリンピック」というフレーズもあったが、このコンパクトというのも、オリンピックの肥大化を抑止したいということで、IOCがコンパクトな大会を求めていたのも事実である。しかし国民にとってコンパクトというのは、小規模な慎ましいイベントと受け止められるおそれはないだろうか。コンパクトというのは、「選手や観客、メディアの移動時間が少なく済む」という利便性のことで、IOCには受けても、一般の人たちに理解されたかはわからない。

それから、もうひとつの特徴は、「アスリートファースト」の大会にするという点。これは当たり前のことだが、この背景には、これまでアスリートが必ずしも大切にされてこなかった歴史があるとの認識に基づくのかも知れない。だいたいこの3つが、アピールポイントになっている。

国際貢献形オリンピックということでは、もし東京招致が決まった時には、オリンピックの入場券を寄付金つきにするという考えをもっていた。

最近、寄付つき商品は多くなってきているが、例えば、ピンクリボンキャンペーン月間にワコールのブラジャーを試着すると、一回の試着につき10円をワコールが乳癌撲滅の団体に寄付するキャンペーンを行なっている。寄付つき商品のはじまりは、1980年代初頭、アメリカン・エクスプレスカードの「自由の女神修復キャンペーン」にある。アメリカのシンボルのひとつ、「自由の女神」の修復を行なおうにも、公的資金では賄い切れないことを知ったアメックスが、利用者のカード使用金額に応じて修復費として寄付することにしたのである。すると、アメックスの加入者が増え、カード利用の頻度・金額が増え、アメックスの業績が向上し、「自由の女神」の修復もできたのである。

このマーケティング手法は「Cause-related Marketing」といわれている。「Cause」というのは、「主張」を訳している専門書もあるが、「社会的大義」と訳すほうが適切であると思う。つまり、自分たちの商品を介してお客さんを「Cause」に動機づけるマーケティング手法であり、あるいは、Causeへの関心を喚起することで販売促進につなげる方法と言ってもいいだろう。HondaはF1で、マシンにスポンサーのロゴを入れる代わりに、アース・カラーのボディで環境保護をアピールしたことがあった。

そして、オリンピックもこの手法を応用し、入場券を寄付つきにしてはどうかと考えた。オリンピックを開催すると黒字になるのであれば、黒字分を寄付の形で、オリンピックの理念にかかわる活動に取り組んでいるNPOやNGOなどの公的団体に寄付をする。寄付先リストは一般の人たちからの

推薦を参考に作り、チケット購入者はそのリストの中から寄付先を自分で指定できるようにする。これの効果としては、

- ①今までオリンピックやスポーツに関心はないが、Cause に関心のある人をオリンピックにひきつけるきっかけになる。地雷除去に関心のある人が、オリンピックの理念に関心をもつようになるかも知れない。
- ②オリンピズムというオリンピックの理想、人生哲学を一般の人に知ってもらえる。オリンピックは、一般の人にとって、4年に1回開催される総合的な国際スポーツイベントとされているが、実は、オリンピックの本質はオリンピズムという考え方にある。オリンピズムという理想的な人生哲学と、それを広めていくオリンピック・ムーブメントこそがオリンピックの特徴で、オリンピック・ムーブメントのひとつの形態がオリンピック競技会である。

これは、クーベルタン以来IOCが大事にしてきた思想で、ワールドカップなど他のスポーツイベントとオリンピックを分かちポイントである。しかしこの最も肝心な部分が、日本では残念ながら国民に普及・浸透してない。そこを伝えていく必要があるということで、チケット購入時に、寄付対象リストに載った団体の活動を知ることを通じ、オリンピックが目指していることやオリンピックとは何かを理解してもらえきっかけに、寄付つきチケットになるのではないかと考えた。

◆ディスカッション1◆

中塚：寄付金つき入場券の話は初めて聞いた。PR不足ではないか。

嵯峨：前例がないのでそうした手法が可能であるかIOCに照会していた。計画書には明記されていない。

白井：問題は、オリンピックが決まったらやるということで、オリンピック・ムーブメントを高めていく手法とは言えない。他に「コンパクト」という問題だが、なぜ都心とするのかが疑問。将来的にどうするつもりだったのか。応援しているのはメディアなど、もうかるところが一所懸命応援している。若い人は別に関心なかった。東京はスポーツ環境が一般市民にとって貧弱。その環境でオリンピックができるっていうのは、ちょっとちがうのでは？ 高校生や一般の人がサッカーするのに、グラウンド確保も大変。ただ、もし実際開催されたら盛り上がると思う。目指したものがちょっとちがうような。

嵯峨：都心での開催について指摘があったが、都市博予定地の有効活用も東京都の狙いにあったのではないか。

麻生：コンセプトの根幹にあるものということで聞いていたが、実は、「スポーツ」という言葉はほとんど出てこなかった。本当にスポーツ環境や社会的な大義に置き換えられなかったのか？

嵯峨：理念の中に「スポーツを通じた交流」はあったが、これからの日本のスポーツをどうしていくのか、新しいスポーツのビジョンに対する訴えがほとんどなかったことは大いに反省すべき。環境族が多く、スポーツ関係者が少なかった。

牛木：1964年のオリンピックは、経済復興の途中にあった。オリンピックのおかげで日本経済が発展したわけじゃない。首都高速はオリンピックのときにできたが、東京という都市に必要なものだからつくったもので、オリンピックのためだけに作ったのではない。本来は、いろんな施設、立派な施設があるからオリンピックしようというのが本当だ。オリンピックのために施設を作ろうという

のは、考え方が逆転している。

いまの話の中で、オリンピズムというものが、他の競技会と違うところだということだったが、「これがオリンピックだ」という説明がない。200億円を使ってのキャンペーンをやっている中に、これこそオリンピズムだっていうものがなかった。ぼくは、オリンピズムそのものに反対だが、環境よりオリンピズムが大事ということなのか？

嵯峨：長野オリンピックの時に「一校一國運動」を行った小出博治さん（長野国際親善クラブ）の話では、今でも30校くらいで国際交流が続いている。長野のあとに行われたソルトレーク、トリノ、北京の大会でも、日本発信のこのオリンピック・ムーブメントが続いている。国内のほうは、先生が熱心な学校では続いているが、やめた学校も多くあるようだ。

2. オリンピアンと国民とスポンサーの新パートナーシップ

次に、「オリンピアン（オリンピック選手）と国民とスポンサーの新しいパートナーシップ」について話す。JOCは「チーム、がんばれ日本」という選手団への応援組織を結成する。オリンピックが近づくと、一般に寄付を募り、集まった資金で選手になんらかの助成を行なう。寄付金と引き換えに、ピンバッチまたは携帯用の根付けをもらえる。実際のところ選手に何をしてあげているかというところ、選手には「お守り」をあげた。北京、バンクーバーでは「チーム、がんばれ日本」の活動はなく、トリノ大会で最後になったようだ。

トリノ大会が終わり収支を弾いたところ、赤字だった。始まった当初は、選手の強化費を捻出しようとの意図もあったようだが、こういう形で、国民がオリンピックや選手を応援するのは限界があるように思う。一般の人たちは、スポーツ選手というのはお金持ちだと思っているのではないか。だから、選手のための寄付というのは集まりにくいと思う。選手が国民に与えられるものは何かというと、「勇気」「希望」「感動」「夢」など。つまり、「チーム、がんばれ」は、勇気を与えてくれる選手の活動を国民が支え、応援していくという、支える・支えられるの関係である。そうではなく、選手と国民の双方が同じ目標に向かってパートナーとして協力して行なっていく活動があってもいいだろうと思う。その点「チーム日本」というのはいい名称で、選手と国民からなる「チーム」として、それでは何をやったらよいか。

スポーツ選手の知名度や影響力を活かし、先にあげた cause 大義に寄与する社会的な活動を、オリンピアンと国民が力を合わせて取り組むのはどうだろうか。たしかにスポーツは感動であったり、勇気を与えたりするという点で、それ自体が社会貢献である、といえなくもないが、一步踏み込んで cause への貢献があってもいいだろう。たとえば、福岡ホークスの和田毅投手は、投球数や勝ち方に応じてワクチンを途上国に寄付する活動をしている。自分の得意を活かしながらも、自分のパフォーマンスにとって励みとなる活動に国民が賛同し、応援している。他にも考えられるのではないだろうか。

国民と選手がパートナーとしてやっていく試みは、国民も最近では社会貢献に意識・関心が高まってきつつあるので、掲げる cause 次第ではうまくいくのではないかな。

ペットボトルのキャップをゴミとして燃やさずに資源として分別回収し、リサイクル業者に売って得た利益をワクチンの購入にあて途上国へ贈るといった活動も広がってきている。スポーツ界も国民と一体となって取り組むに値する活動のひとつではないかと思う。スポーツはドリンクの消費に寄与しているだけでなく、スポーツをやること自体が、安静にしている場合よりも温室効果ガスの排出量が多いわけだから、スポーツ界がキャップ回収の活動を呼びかけ、競技会場などで回収を行なうなど先導的な役割を果たすことができる。

3. 1964 Tokyo レガシー・ツアーとスポーツ・ミュージアム

レガシーというのは、オリンピックの開催によって開催地に残される遺産のこと。最近ではオリンピック招致がかなわなかった際にも、招致活動によって得られるレガシーというのを計画し、ビッド・ファイル（開催計画書）に明記するようIOCは求めている。

今回の招致レガシーには、目に見えるものとしては、嘉納治五郎の名前を冠した国際スポーツ研究・交流センターが代表的なものである。また、無形のレガシーとなるとたくさんある。

特に1964年の東京オリンピックを経験された方の思い出なども、広い意味でレガシーに含めていいとすれば、東京都内には、1964年の有形・無形レガシーのほか、今回の招致レガシーも色々あるだろう。ただ、それらは点として散らばっている状態なので、なんとかそれを線にしてたどっていくことによって、オリンピックの価値やオリンピズムなど、最も大切な部分に触れたり、実感したりできないだろうかと考えている。

オリンピックにより親しんでもらえるよう、オリンピックとはどういうものかを知ってもらえるようなレガシー・ツアーを「はとバス」あたりと協同で実現できれば、より多くの人に触れてもらえると思う。

レガシー・ツアーの拠点となる、「オリンピック・ミュージアム」のような施設が日本にもあっているのではないか。ご存知のように、「秩父宮スポーツ博物館」が国立競技場の片隅にあることはあるが、あそこの倉庫にはまだまだたくさんの貴重な品が保存されており、お宝が見られればと思っている。有森裕子さんの記念館が岡山にあり、円谷幸吉さんの記念館は閉鎖になったと聞いているが、スポーツ関係のミュージアム整備はこれからの課題である。今後日本では、所蔵品をシンボルとして、オリンピック当時の状況や選手の生きざまなどを生き生きと語り、紹介できるキュレーターを育てる必要もある。過去の歴史を語り継いでいくことが大事だと思うが、現状は厳しく、なかなか予算がつかない。

◆ディスカッション2◆

佐野：日本体育協会は2011年で100周年。しかし正直、やることがない。記念誌をつくってシンポジウムをするだけ。全国3か所で、2010年からはじめる。

仲澤：何もないわけではなく、福島（地域スポーツモデル）、京都（京都議定書関連で環境）、広島（平和）でシンポジウムを行う。最後は東京で、総括シンポジウムを行う。

100年を振り返るが、幻のオリンピックは、戦争に集中するためにオリンピックを返上したのかなど、色々な説があるが、戦中の大日本体育協会の立ち位置を明確にレビューしないと次の100年はいけないだろうということで、進めている。返上の背景は非常に重要で、論議を呼びそうである。あとは、国体のあり方。JOCが分離独立したあとの日体協の統括使命について。

佐野：招致活動について、JOC、日本体育協会、招致委員の三者の連携が全く取れていなかったのではないかと反省する。今後、日体協のツールを使って日本のスポーツ環境をどう整えていくか、それに対して何ができるのかを、日本体育協会として考えなくてはいけないと思っている。

牛木：21世紀のオリンピックを考えるなら、地球がこうなっている、だから将来はこうしようじゃないかという、将来の大きなイメージがなければならない。

白井：学生にオリンピック映像（ベルリン、東京、札幌）をDVDで見せるなど、お金をかけなくて

も伝える方法はあるのではないか。ベルリン五輪の「民族の祭典」も非常にいい。

嵯峨：民族の祭典、美の祭典は、ハリウッド映画慣れした今の若者には退屈かも知れない。

白井：ただ見せるだけだと眠くなるが。

牛木：映画館で観れば結構いい

白井：どうやって見せていくか、場づくりが重要。

阿部：僕は有形のレガシー（オリンピックを通じてできた施設）の恩恵を受けた人のひとり。しかし神宮プールをフットサル場にすることを許した日本のスポーツは何なんだ！ あれこそレガシーの最たるものなのに。150億かけるなら、あそこを残すことに使えばいいのに。代々木のスケート場もなくなったし。

牛木：有形レガシーを全部キープするのは難しい。ただ、ミュージアムの役割は、①展示、②記録・保存、③調査・研究である。このような機能の組織を作ることが大事。これだけデジタル化が進み、通信が発達しているから、東京の真ん中にドーンと作る必要はなく、ミュージアムネットワークを作ればいい。サッカー協会に殿堂委員会というのがあり、川淵さんが館長だが、協会の上のほうの人は、展示物を集めることしか考えていないようだった。しかしそれだけでなく、別にサッカー史の研究会もしている。遺産を集めた箱を別に東京に作る必要はなく、藤枝に作るとか、分散することもできる。

白井：ミュージアムの機能には、集約が大事。正面きっては難しいのでは？

牛木：国立競技場も改修計画があがっている。ローマの遺跡みたいに置いておくのは無理。

4. 全国の学校でのオリンピック出前授業

今回、オリンピックの招致支持率は55.5%であった。関係者は低いと受け止めている。目標は70～80%だったと思う。IOCが行なった調査方法は、日中の有線電話による問い合わせだったらしい。だとすれば回答者の年齢などはある範囲に限られていた可能性がある。

事情はどうあれJOCは、国民の半分にしかオリンピック＝自分たちは支持されていないのかとショックを受けているようで、これを反省材料に、オリンピック・ムーブメントにますます力を入れて取り組んでいかなければならないという気持ちになってきたようだ。

JOCには「ゴールドプラン」というマスタープランがあるが、従来のもは、どうやってオリンピックで金メダルを取るかという、強化育成の計画に終始していた。しかし、招致活動を通して、これからはそれだけではいけない、オリンピック・ムーブメントも戦略的に展開していくことになりそうだ。

具体的な展開としては、既に日本サッカー協会が行っている「夢プロジェクト」のように、全国各地の学校にオリンピックを講師に派遣する活動を積極的にしていく。オリンピックから直接聞くオリンピックの話は、子どもたちにインパクトがあるだろうし、響き方も違うと思うが、自らの経験と自慢話で終わってしまうことが心配である。

そこで、オリンピズムの3つの価値を視点に各自の経験を語ってもらうようプログラムできれば、

- ある程度は方向性も安定し、オリンピックの特徴も伝えられるかと思う。オリンピックの価値とは、
- ①エクセレンス（より高く強く速く、勝利を目指して努力するそのプロセスを大事にする）
 - ②フレンドシップ（スポーツを通じ友好親善を深めることで世界平和の創造に貢献する）
 - ③リスペクト（対戦相手はもちろんスポーツや環境、先生、指導者、家族への敬意を含む）

これらにまつわる経験をオリンピックは実際に色々としているはずなので、自分の経験をオリンピックの価値の視点から話してもらおう。また、オリンピックの価値に関わる経験談以外にも、たとえばオリンピックの創始者であるクーベルタンのことや、日本のオリンピック・ムーブメントの父・嘉納治五郎のこと、バレーボールの振興に尽力した松平康孝さんの功績など、自分の経験から離れ、オリンピックの歴史やスポーツの一般的な話も加えてもいいだろう。

授業を行なう際、オリンピックの魅力が凝縮した映像を、講師のプレーの模様も織り交ぜたものを見せ、モチベーションを高めることも考えている。オリンピックとは、オリンピックとは何かをイメージとして直感できるような、短いプロモーションビデオを作りたい。ただ、メダリストの映像はたくさんあるようだが、オリンピック全ての映像が揃うわけではないので工夫が必要になりそうだ。

東京都の教育委員会がつくった「オリンピック副読本」は、都内のスポーツ推進校を中心に、小中高に配られた。全生徒に行き渡ったわけではないようだが、画期的な試みである。作成・配付のタイミングがちょうど招致活動の最中であったので、招致活動の盛り上げやPRの狙いもあると思われるが、大義名分は、オリンピック教育の推進にあると都では言っている。児童・生徒が学校で勉強したオリンピックの話の家で家族にしてくれれば、親もまたオリンピックの理解者になってくれるだろうと期待していたが、実際は、家庭内コミュニケーションが希薄なせいか、支持率のアップまでにはつながらなかった。

現場の先生たちの反応にも温度差があるようで、上からの押し付けに反発する向きもあったと聞いている。オリンピックにも温度差が予想される。義務感だけで学校に出かけても子供はすぐにそれを察するらしい。知名度の大小に関係なく、ボランティア精神のある人にやってもらうのがいいかも知れない。オリンピックを対象にした研修会についても検討しなくてはいけない。

◆ディスカッション3◆

牛木：アイデアとしては面白いが、トップアスリートの生活は、非常に特殊である。先日、体操の米田に、ある研究会で話をしてもらった。彼の方から来たいということでギャラも取らなかったが、話を聞いて失望した。一日中体操をしている人の話は、一般の子供とすりあわず、面白くない。オリンピックは実際、商業化されていて、選手は現実離れしているから、出張事業は難しい。派遣する企画はいいが、あまり飾り付けないほうがいい。

嶋崎：冊子の話だが、教材を使いこなせる教員がいない。時間も無い。私は教科が国語なので、使う機会がない。

嗟哦：という懸念を都の教育委員会でも予想していたらしく、教員を集めた研修会を開いたと聞いているが…。昭和29年の国語の教科書には、1932年のロサンゼルス大会の馬術競技に出場した城戸俊三選手が、ゴール寸前の障害を越える力が残っていないとみた愛馬をいたわり棄権した話が掲載されている。JOCの竹田会長は、小学生の時の国語でこの物語に触れてますます馬術競技にのめり込んでいった。1936年ベルリン大会の棒高跳びに出た西田修平と大江季雄の「友情のメダル」など、オリンピックにまつわる話が教科書に載っていた時代があった。

牛木：日本は、教科書でオリンピックの精神を教えている国だ。オリンピックが教科書に載ったりして、日本が一番オリンピックについて知られている国だ。オリンピックが普及してないなどと心配

する必要はない。55.5%は東京オリンピックに対する賛否であって、オリンピックそのものに反対するものではない。

嵯峨：英語の教科書にもかつて載っていたことがある。長野オリンピックの聖火ランナーを務めた、地雷除去活動家のクリス・ムーンや、1994年のリルハンメル・オリンピックで、「花はどこへ行った？」の曲に合わせた演技で、反戦を訴えたカタリーナ・ビットの話などがある。

中塚：「オリンピック教育」と言い過ぎるとうさんくさくなるが、「スポーツ教育」と言えばもっと広い意味でとらえられるし、進めていきたい。体育以外に国語でも、どの教科でも取り上げることができるはず。

高田：日本代表の選手じゃなくても、自分よりできる人の話を聞くだけでも子供は喜ぶ。ロサンゼルス・オリンピックから商業化しているが、オリンピックにはこだわり価値があると思う。

嵯峨：オリンピックは堂々と青臭い美辞麗句を並べることに価値がある。オリンピックはいわば青春のようなものかも知れない。世の中には戦乱が依然としてあるし、オリンピックには汚れた面もあるが、だからといってオリンピックを完全否定するのではなく、むしろ現状がそうであるからこそ、高邁な理想を掲げ、その実現を目指して愚直に運動を進めて行くことに価値があるとも言える。

白井：オリンピックで、柔道の石井は、相手の選手が足を痛めているのに、手を振り上げてポーズをとる。これについての批判はほとんどなかったが、朝青龍に対しては批判がすごかった。どうして、日本柔道の精神と言ってる人が何も言わないのか、と思った。こんな風に日本のスポーツはなっちゃったのかと思った。

議論は尽きない。そのままの勢いで、2次会会場の「ルン」へ